

## [64] キーロフ・バレエ ～典雅な動きと現代的リズム感～

### ラブロフスキー版『ロミオとジュリエット』『シンデレラ』『白鳥の湖』

2003年12月13日 東京新聞 夕刊

今年にはサンクトペテルブルク建都三百年だとか。

このロシアの古都が世界に誇るキーロフ・バレエ（現マリインスキー・バレエ）が、日本での「ロシア芸術祭」で三つのプログラムを上演した。

『ロミオとジュリエット』の初日では、世界的な指揮者ゲルギエフが振るという幸運が実現。彼は現在、本拠マリインスキー劇場で音楽とバレエを併せて統率する総裁・芸術監督の座にある。その責任感もあるだろう。

これがじつに素晴らしかった。豊かで深い音色のオーケストラが音楽本位のテンポをまったく崩さない。鋭く追い込むゲルギエフならではのリズムが竜巻のように上り詰める。そして舞台のダンサーは、その者とびったり呼吸を合わせて、まるで踊る身体から音楽がほとばしるかのように寸分狂わぬ動きを見せた。打ち合う剣すら楽器の一部。音楽と舞踊の双方に魅せられた観客は、ただ息をのむばかりだ。

このラブロフスキー版『ロミオ…』はかつて映画にもなり、ロシア・バレエ黄金期の象徴ともい

## [64] キーロフ・バレエ ～典雅な動きと現代的リズム感～

### ラブロフスキー版『ロミオとジュリエット』『シンデレラ』『白鳥の湖』

2003年12月13日 東京新聞 夕刊

うべき名作である。暇に焼き付いたその典雅な動きが、ゲルギエフの現代的なリズム感で鮮やかに蘇った。同じものだが、まったく別のものでもある。まさに過去と現在をつなぐ幻の舞台だった。

主演のヴィシニョワとフアジェーエフをはじめ、レベルの高いダンサーたちの力があって始めて可能な舞台だったことは言うまでもない。ロシア・バレエの本領発揮である。

『シンデレラ』もプロコフィエフの音楽だが、バレエのほうはラトマンスキーの新振付。装置が斬新である。鉄骨を組んで幾つもの高架や階段を作り、それを昇り降りすることで演出に動きを生み出している。中央上空に吊られた金属の大きな輪が大時計になり、宮殿のシャンデリアになり、地球儀になる。

振付もまさに現代バレエらしく腰や胸を突き出し、手足のねじれを使ってコミックな演技をするのだが、魅力と説得力がやや不十分。キーロフ・バレエ固有のエレガンスや丸みを帯びた様式美が仇になって、新しい動きを十分にこなし切れない

## [64] キーロフ・バレエ ～典雅な動きと現代的リズム感～

### ラブロフスキー版『ロミオとジュリエット』『シンデレラ』『白鳥の湖』

2003年12月13日 東京新聞 夕刊

せいもある。伝統だけに安住せず新時代と肩を並べようとする意欲は伝わるが、その試みがほんとうにやむなき必然によって内から生み出されたものなのかどうか、挑戦の結果については、バレエ団の今後を見ないと何とも言えない。

さて『白鳥の湖』といえ、このところ新演出・新振付の話題作が相次いでいるが、古典のそれはやはりロシア・バレエの最大の財産だ。開幕早々、舞台の上の美しい身体に思わずため息が出た。

同じロシア・バレエでもポリシヨイとはまったく違って、たおやかな肩と胸から指の先まで優美な線を描く。だが第二幕、第三幕と進むにつれて、昔に比べて手薄なコール・ド・バレエの陣容や演技に、そこはかとなじ寂しさを覚えずにはいられなかった。往年のあの重厚で壮麗なキーロフの舞台は、現代ではもはや無理なのだろうか。時代は変わったのだ。

とはいえロバートキナが踊るオデットは、それと別の意味で、まさに現代そのもの。最も抒情的な役であるはずのオデット姫を、じつにクールに

## [64] キーロフ・バレエ ～典雅な動きと現代的リズム感～

ラブロフスキー版『ロミオとジュリエット』『シンデレラ』『白鳥の湖』

2003年12月13日 東京新聞 夕刊

端麗に、まるで体温のないプラスチックの彫像のような造形美で表現する。少し前のマハリナもそうだったが、キーロフの主演バレリーナのなかには、現代バレエの最新テクニックを完璧に吸収して、クラシック・バレエを現代の抽象バレエさながらに踊る人がいる。しかしこれも、キーロフ（ワガノワ・バレエ学校）の完璧な規範という土台あってこそその革新には違いない。